

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	越後 純子 【人間発達科学専攻 平成21年度生】	要 旨
論文題目	『婦女鑑』の研究	<p>本研究は、女性の徳行の話を列伝形式で記した女子用修身書の一つである『婦女鑑』（1887年、宮内省蔵版）について、多面的に考察を行い、歴史的に位置付けることを目的としたものである。同書は明治天皇の皇后の内意を受け、宮内省文学御用掛の西村茂樹が編纂に当たり、華族女学校の教科書に充てる目的も持っていたという特徴を有する書物である。</p> <p>第Ⅰ部では、『婦女鑑』自体の性格を、成立の前史、成立事情、徳目構成と例話内容、例話の出典等の検討により明らかにした。『婦女鑑』は『明治孝節録』『幼学綱要』に続く宮内省蔵版の修身書で、儒教主義の編纂姿勢が窺われる『幼学綱要』の補遺として成立したが、西村が前任者に代わり『婦女鑑』編纂を命じられたのは、宮内卿伊藤博文の下で各種改革、華族女学校の設立準備が行われた時期であった。編纂稿本にある徳目名・徳目の説明文や、刊本の例話内容の検討、『幼学綱要』及び明治前期の同類書との比較によると、和漢洋の女性を取り上げ多様な徳行を扱っていることが『婦女鑑』の特質と言える。編纂稿本記載の例話の出典名や、例話選択を見ると、和漢洋にわたる多様な出典構成と、様々な徳目の例話や特徴的な例話群の採用が『婦女鑑』の特質につながったことが分かる。</p> <p>第Ⅱ部では、『婦女鑑』の性格を、良妻賢母思想の変遷や女子用修身教科書史の中での位置、編者の思想等との関係、下賜や普及の状況等の考察により、歴史的に明らかにした。『婦女鑑』は儒教的な女性観と良妻賢母思想の中間的位置にあるものと言え、その特質は『婦女鑑』以前・以後の修身教科書とも異なる傾向を有している。西村の思想の影響と同時に、華族制度改革期に開校準備が進められた創立期の華族女学校向けに作成されたという要素が、『婦女鑑』の性格に深く関わり、結果として列伝形式女子用修身書史上では総合性を帯びたと考えられる。また、『婦女鑑』は限られた範囲に下賜された一方、早い段階から発売許可され印刷部数が増加した時期も見られ、大正・昭和期には、『幼学綱要』と対をなす販売等、成立事情の一面のみが注目されて使用される展開をたどったことが明らかとなった。</p>
審査委員	(主査) 教授 米田 俊彦	
	教授 池田 全之	
	准教授 富士原 紀絵	
	教授 小風 秀雅	
	教授 小玉 亮子	